# ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

| | |
|---|---|
| 教員氏名 | 石川　亮子 |

| | |
|---|---|
| 主な担当科目 | 西洋音楽史Ⅰ,西洋音楽史Ⅱ,器楽の歴史と作品,音楽美学,音楽基礎演習,西洋音楽史特殊講義,課題研究Ⅰ,課題研究Ⅲ,原典講読研究Ⅰ |
| シラバス | 次ページをご参照ください |

| | |
|---|---|
| 2022年の<br>教育目標・授業に<br>臨む姿勢 | ①明快でわかりやすい授業<br>②公平で公正な成績評価<br>③ICTを活用したコミュニケーションを含む授業運用 |
| 2022年の教育に関する自己評価 | 本年度は教員として常に心がけている①と②に加えて、昨年度からメディア授業科目として運用されている「西洋音楽史Ⅱ」について、オンデマンド教材や確認小テストForms等をブラッシュアップしながら、より学習効果を高める方策を実践的に検証しました。引き続き、これからの時代の授業展開を構築していきたいと思います。 |

| | |
|---|---|
| 2022年のFD活動に関する自己評価 | 非常勤の先生方とも意見交換をしながら、誠実に取り組むことが出来たと思います。 |
| 授業改善のために<br>取り入れた研修内容 | ひとりひとりの学生の多様な背景を理解し、きめ細かく丁寧に向き合っていけるように努力しています。 |

科目名－クラス名

# 西洋音楽史Ⅰ　H

**曜日時限**

月 2時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 1～ | 通年 | 4 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 70 | 30 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

西洋芸術音楽の歴史について学びます。本学には多彩な音楽史系科目がありますが、なかでも音楽史の学びの第１段階として、この「西洋音楽史Ⅰ」の授業の最も重要な目的は、①音楽の歴史の大きな流れ、そして本質的な流れを捉えること。②各時代の様式（音楽的な特徴）のイメージを捉えること。そして③さまざまな様式の音楽に触れることで、音楽人に欠かせない「音楽的な経験」そのものを豊かにすることです。各時代を代表する作曲家や作品について、目（楽譜）と耳（音）と頭（知識）によって理解することを目指します。
クラシック系の楽器や声楽の実技を専攻している学生だけでなく、ジャズ、ポピュラー、ミュージカル、バレエ、アートマネジメント、舞台スタッフ、音楽療法、そして音楽教養、音楽と社会など、音楽にかかわるすべての専攻の学びの基本になるものです。

## 学修成果

「西洋音楽史」は、これから皆さんが音楽を専門的に学んでいくために必要となる知識を扱う科目です。歴史の流れだけでなく、そこで登場するさまざまな音楽の種類やジャンルについて、また音楽の基本的な形式や楽器についての知識も学びます。これは、将来皆さんが活躍する舞台となる演奏の現場や、音楽ビジネス、音楽教育の現場で必須の知識です。
そのほかにも、授業外学修で多くの音楽を聴いたり、レポートを書いたりすることで、音楽の世界で役に立つさまざまな基本知識やルール、「資料を集め、読み込む力」（文献リテラシー）、「情報を精査し、まとめる力」、「文章表現力」、「作曲者名や曲名などの正しい表記の仕方」などを身につけていきます。

## 授業展開と内容

第1回　導入：「西洋音楽史」とは何か？
—「西洋」とは、「音楽」とは、「歴史」とは何かに目を向けよう！

第2回　中世①：グレゴリオ聖歌とオルガヌム
—中世の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第3回　中世②：宮廷歌人の世界

第4回　中世③：中世の記譜法／アルス・ノヴァとトレチェント

第5回　ルネサンス①：中世からルネサンスへ—神のための音楽から、人間のための音楽へ
—ルネサンスの音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第6回　ルネサンス②：通模倣様式とその発展

第7回　ルネサンス③：宗教改革と反宗教改革の音楽

第8回　ルネサンス④：目で見る音楽—ルネサンスの詩と音楽、色鮮やかな世俗音楽の世界

第9回　バロック①：ルネサンスからバロックへ　—モノディ歌曲とオペラの誕生
—バロックの音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第10回　バロック②：オペラの発展とナポリ派オペラ

第11回　バロック③：カンタータとオラトリオ

第12回　バロック④：ソナタと組曲　—「言葉のないドラマ」としての器楽の歴史へ

第13回　バロック⑤：協奏曲

第14回　バロック⑥：フーガ

第15回　まとめ：西洋音楽とその歴史の特質　—「音によるドラマ」としての声楽の発展と器楽の台頭

第16回　導入：バロックから古典派へ

第17回　古典派①：「言葉のないドラマ」としての器楽と「ソナタ形式」
—古典派の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第18回　古典派②：ハイドン　—弦楽四重奏曲を中心に

第19回　古典派③：モーツァルト　—ピアノ・ソナタと交響曲を中心に

第20回　古典派④：ベートーヴェン　—交響曲を中心に

第21回　古典派⑤：古典派の歌曲とオペラ　—グルック、モーツァルト、ベートーヴェン

第22回　ロマン派①：古典派からロマン派へ　—拡大するオーケストラと交響曲
—ロマン派の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！

第23回　ロマン派②：「描く音楽」としての交響詩、民族主義と国民楽派

| | |
|---|---|
| 第24回 | ロマン派③：ピアノとピアノ音楽 |
| 第25回 | ロマン派④：声と楽器の織り成すドラマ　―オペラ |
| 第26回 | ロマン派⑤：声と楽器の織り成すドラマ　―歌曲 |
| 第27回 | 近・現代①：ロマン派から近・現代へ　―印象主義と表現主義<br>―近・現代の音楽の様式（音楽的な特徴）を知ろう！ |
| 第28回 | 近・現代②：十二音技法と新古典主義 |
| 第29回 | 近・現代③：ノイズと偶然性の音楽、電子音楽の登場、そして… |
| 第30回 | まとめ：ふたたび西洋音楽史の流れを振り返ると、私たちの未来には何が見えるか<br>―西洋音楽史での学びを、自分自身の演奏や、音楽の聴き方、音楽とのかかわり方に、どのように生かせるかを考えよう |

## 履修上の注意

①コース、学年によってクラス指定がある。ポータルサイトに発表されるので、必ず指定されたクラスで受講すること。原則としてクラス変更はできない。変更する必要がある場合は、履修相談を必ず受けること。②西洋音楽史Ｉが必修のコースは、今年度は西洋音楽史の履修を優先すること。③初回の授業には必ず出席すること。④教科書は必ず持参すること。⑤提出物の期限を守ること。⑥西洋音楽文化の背景を理解するために、「西洋文化史Ｉ」「西洋文化史Ⅱ」の両科目（選択科目）を、可能な限り卒業までのいずれかの段階で履修することを勧める。

## 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内容についての理解を深めるためには、授業外学修、特に復習が欠かせない。授業外学修として全員必ず行ってほしいのは、以下の２つである。①授業で取り上げた時代や事柄について、教科書や参考書の該当箇所を読むこと。②授業で取り上げた曲を「ナクソス・ミュージック・ライブラリー（NML）」でもう一度聴くこと（いろいろな演奏者で聴いたり、同じ作曲者の別の曲も聴いてみたりするのはなお良い）。特に１年生は、知識を増やすことも大切だが、それ以上に、積極的に沢山の音楽を聴いて「音楽的経験」を増やすことが重要である。図書館のC

## 教科書・参考書

教科書（購入必須）：坂崎紀著『西洋音楽史』（アカデミア･ミュージック刊）。
参考書（購入は必須ではないが、興味・理解を深めるための助けとなるもの）：①岸本宏子・酒巻和子・小畑恒夫・石川亮子・有田栄著『つながりと流れがよくわかる　西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング刊）、②近藤譲著『ものがたり西洋音楽史 』（岩波ジュニア新書、岩波書店刊）

科目名－クラス名

# 西洋音楽史Ⅱ

**曜日時限**

火 5時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 2～ | 後期 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 60 | 0 | 0 | 0 | 40 | 100 |

## 教育到達目標と概要

本授業はメディア授業として開講される（全15回のうち8回をオンデマンド、7回を対面授業で実施する。詳細は授業展開と内容を確認のこと）。この授業では「西洋音楽史Ⅰ」の基礎知識をさらに深めるとともに、特に16世紀以前（中世・ルネサンス）と20世紀以降（近・現代）の音楽について理解し、音楽史に対する幅広い教養を身に付けることを目的とする。これらの時代の音楽は、コンクールや演奏会のレパートリー、さらには学校の鑑賞教材にも含まれており、その歴史的背景や時代様式を理解することは、教育者・演奏者を目指すためにも不可欠となる。教職課程履修者や進学予定者を主たる対象とするが、そうでない者も「西洋音楽史Ⅰ」に続く科目として「西洋音楽史Ⅱ」を履修するようにして欲しい。

## 学修成果

16世紀以前（中世・ルネサンス）と20世紀以降（近・現代）の音楽について豊かな知識を得ることによって、西洋音楽史に対する新たな視座を獲得することが出来る。またそのことを通して、より深く時代様式を踏まえた解釈や演奏ができるようになる。

## 授業展開と内容

| | |
|---|---|
| 第1回 | 導入―西洋音楽史をより深く学ぶために（対面授業） |
| 第2回 | 中世の音楽（オンデマンド） |
| 第3回 | ルネサンスの音楽①（オンデマンド） |
| 第4回 | ルネサンスの音楽②―ミサ曲の変遷（対面授業） |
| 第5回 | バロックの音楽①―ナポリ派オペラ（対面授業） |
| 第6回 | バロックの音楽②―ソナタとコンチェルト（オンデマンド） |
| 第7回 | バロックから古典派へ―啓蒙思想とソナタ形式（オンデマンド） |
| 第8回 | 古典派の音楽①―モーツァルトのオペラと協奏曲（オンデマンド） |
| 第9回 | 古典派の音楽②―ベートーヴェンのピアノソナタを分析する（対面授業） |
| 第10回 | ロマン派の音楽①―ピアノと室内楽、そして歌曲（オンデマンド） |
| 第11回 | ロマン派の音楽②―オーケストラと国民楽派（オンデマンド） |
| 第12回 | 20世紀の音楽①―印象主義と表現主義、原始主義（対面授業） |
| 第13回 | 20世紀の音楽②―新古典主義とジャズ、12音技法（オンデマンド） |
| 第14回 | 20世紀の音楽③―ヨーロッパの前衛とアメリカの実験主義（対面授業） |
| 第15回 | 総括―なぜ西洋音楽史を学ぶのか（対面授業） |
| 第16回 | |
| 第17回 | |
| 第18回 | |
| 第19回 | |
| 第20回 | |
| 第21回 | |
| 第22回 | |
| 第23回 | |
| 第24回 | |
| 第25回 | |
| 第26回 | |
| 第27回 | |
| 第28回 | |
| 第29回 | |
| 第30回 | |

## 履修上の注意

本授業はメディア授業科目として開講される。対面授業となっている授業回については、教室で授業が行われるため出席すること。オンデマンドとなっている授業回

については、以下のような手順による。1）Teamsにアップされている課題プリントを解く→2）「動画①解答と解説」を視聴する→3）「動画②本日のトピック」を視聴する→4）Formsの小テストを実施して送信する。動画の視聴に際しては、指示された教科書のページを読むことが含まれる。4)のFormsについては、授業回の次の週の火曜日23:59までに送信すること。Formsの送信をもって、その授業回の出席とすると同時に授業内小テストを兼ねる。

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

オンデマンドや対面授業にかかわらず、必ず毎回しっかりノートをとること。授業前には予習として、前回のノートおよび教科書を読み返すこと（30分）。また授業後は復習として、授業で取り上げられた作品の全曲を聴き直しながら（60分）、さらにその周辺についても積極的に多くの作品を聴くように努めること。

### 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、プリントをアップまたは配付するので各自ファイルしてきちんと管理すること。参考書：各自が「西洋音楽史」で使用した教科書や、M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）など。詳細は授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 西洋音楽史Ⅱ

**曜日時限**

水 3時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 2～ | 後期 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 60 | 0 | 0 | 0 | 40 | 100 |

## 教育到達目標と概要

本授業はメディア授業として開講される（全15回のうち8回をオンデマンド、7回を対面授業で実施する。詳細は授業展開と内容を確認のこと）。この授業では「西洋音楽史Ⅰ」の基礎知識をさらに深めるとともに、特に16世紀以前（中世・ルネサンス）と20世紀以降（近・現代）の音楽について理解し、音楽史に対する幅広い教養を身に付けることを目的とする。これらの時代の音楽は、コンクールや演奏会のレパートリー、さらには学校の鑑賞教材にも含まれており、その歴史的背景や時代様式を理解することは、教育者・演奏者を目指すためにも不可欠となる。教職課程履修者や進学予定者を主たる対象とするが、そうでない者も「西洋音楽史Ⅰ」に続く科目として「西洋音楽史Ⅱ」を履修するようにして欲しい。

## 学修成果

16世紀以前（中世・ルネサンス）と20世紀以降（近・現代）の音楽について豊かな知識を得ることによって、西洋音楽史に対する新たな視座を獲得することが出来る。またそのことを通して、より深く時代様式を踏まえた解釈や演奏ができるようになる。

## 授業展開と内容

| | |
|---|---|
| 第1回 | 導入―西洋音楽史をより深く学ぶために（対面授業） |
| 第2回 | 中世の音楽（オンデマンド） |
| 第3回 | ルネサンスの音楽①（オンデマンド） |
| 第4回 | ルネサンスの音楽②―ミサ曲の変遷（対面授業） |
| 第5回 | バロックの音楽①―ナポリ派オペラ（対面授業） |
| 第6回 | バロックの音楽②―ソナタとコンチェルト（オンデマンド） |
| 第7回 | バロックから古典派へ―啓蒙思想とソナタ形式（オンデマンド） |
| 第8回 | 古典派の音楽①―モーツァルトのオペラと協奏曲（オンデマンド） |
| 第9回 | 古典派の音楽②―ベートーヴェンのピアノソナタを分析する（対面授業） |
| 第10回 | ロマン派の音楽①―ピアノと室内楽、そして歌曲（オンデマンド） |
| 第11回 | ロマン派の音楽②―オーケストラと国民楽派（オンデマンド） |
| 第12回 | 20世紀の音楽①―印象主義と表現主義、原始主義（対面授業） |
| 第13回 | 20世紀の音楽②―新古典主義とジャズ、12音技法（オンデマンド） |
| 第14回 | 20世紀の音楽③―ヨーロッパの前衛とアメリカの実験主義（対面授業） |
| 第15回 | 総括―なぜ西洋音楽史を学ぶのか（対面授業） |
| 第16回 | |
| 第17回 | |
| 第18回 | |
| 第19回 | |
| 第20回 | |
| 第21回 | |
| 第22回 | |
| 第23回 | |
| 第24回 | |
| 第25回 | |
| 第26回 | |
| 第27回 | |
| 第28回 | |
| 第29回 | |
| 第30回 | |

## 履修上の注意

本授業はメディア授業科目として開講される。対面授業となっている授業回については、教室で授業が行われるため出席すること。オンデマンドとなっている授業回

については、以下のような手順による。1）Teamsにアップされている課題プリントを解く→2）「動画①解答と解説」を視聴する→3）「動画②本日のトピック」を視聴する→4）Formsの小テストを実施して送信する。動画の視聴に際しては、指示された教科書のページを読むことが含まれる。4)のFormsについては、授業回の次の週の火曜日23:59までに送信すること。Formsの送信をもって、その授業回の出席とすると同時に授業内小テストを兼ねる。

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

オンデマンドや対面授業にかかわらず、必ず毎回しっかりノートをとること。授業前には予習として、前回のノートおよび教科書を読み返すこと（30分）。また授業後は復習として、授業で取り上げられた作品の全曲を聴き直しながら（60分）、さらにその周辺についても積極的に多くの作品を聴くように努めること。

### 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、プリントをアップまたは配付するので各自ファイルしてきちんと管理すること。参考書：各自が「西洋音楽史」で使用した教科書や、M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）など。詳細は授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 西洋音楽史Ⅱ　ヨーロッパ実技

**曜日時限**

火 5時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 1～ | 後期 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 60 | 0 | 0 | 0 | 40 | 100 |

## 教育到達目標と概要

本授業はメディア授業として開講される（全15回のうち8回をオンデマンド、7回を対面授業で実施する。詳細は授業展開と内容を確認のこと）。この授業では「西洋音楽史Ⅰ」の基礎知識をさらに深めるとともに、特に16世紀以前（中世・ルネサンス）と20世紀以降（近・現代）の音楽について理解し、音楽史に対する幅広い教養を身に付けることを目的とする。これらの時代の音楽は、コンクールや演奏会のレパートリー、さらには学校の鑑賞教材にも含まれており、その歴史的背景や時代様式を理解することは、教育者・演奏者を目指すためにも不可欠と

## 学修成果

16世紀以前（中世・ルネサンス）と20世紀以降（近・現代）の音楽について豊かな知識を得ることによって、西洋音楽史に対する新たな視座を獲得することが出来る。またそのことを通して、より深く時代様式を踏まえた解釈や演奏ができるようになる。

## 授業展開と内容

| | |
|---|---|
| 第1回 | 導入―西洋音楽史をより深く学ぶために（対面授業） |
| 第2回 | 中世の音楽（オンデマンド） |
| 第3回 | ルネサンスの音楽①（オンデマンド） |
| 第4回 | ルネサンスの音楽②―ミサ曲の変遷（対面授業） |
| 第5回 | バロックの音楽①―ナポリ派オペラ（対面授業） |
| 第6回 | バロックの音楽②―ソナタとコンチェルト（オンデマンド） |
| 第7回 | バロックから古典派へ―啓蒙思想とソナタ形式（オンデマンド） |
| 第8回 | 古典派の音楽①―モーツァルトのオペラと協奏曲（オンデマンド） |
| 第9回 | 古典派の音楽②―ベートーヴェンのピアノソナタを分析する（対面授業） |
| 第10回 | ロマン派の音楽①―ピアノと室内楽、そして歌曲（オンデマンド） |
| 第11回 | ロマン派の音楽②―オーケストラと国民楽派（オンデマンド） |
| 第12回 | 20世紀の音楽①―印象主義と表現主義、原始主義（対面授業） |
| 第13回 | 20世紀の音楽②―新古典主義とジャズ、12音技法（オンデマンド） |
| 第14回 | 20世紀の音楽③―ヨーロッパの前衛とアメリカの実験主義（対面授業） |
| 第15回 | 総括―なぜ西洋音楽史を学ぶのか（対面授業） |
| 第16回 | |
| 第17回 | |
| 第18回 | |
| 第19回 | |
| 第20回 | |
| 第21回 | |
| 第22回 | |
| 第23回 | |
| 第24回 | |
| 第25回 | |
| 第26回 | |
| 第27回 | |
| 第28回 | |
| 第29回 | |
| 第30回 | |

## 履修上の注意

本授業はメディア授業科目として開講される。対面授業となっている授業回については、教室で授業が行われるため出席すること。オンデマンドとなっている授業回については、以下のような手順による。1）Teamsにアップされている課題プリントを解く→2）「動画①解答と解説」を視聴する→3）「動画②本日のトピック」を

視聴する→4）Formsの小テストを実施して送信する。動画の視聴に際しては、指示された教科書のページを読むことが含まれる。4)のFormsについては、授業回の次の週の火曜日23:59までに送信すること。For

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

オンデマンドや対面授業にかかわらず、必ず毎回しっかりノートをとること。授業前には予習として、前回のノートおよび教科書を読み返すこと（30分）。また授業後は復習として、授業で取り上げられた作品の全曲を聴き直しながら（60分）、さらにその周辺についても積極的に多くの作品を聴くように努めること。

### 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、プリントをアップまたは配付するので各自ファイルしてきちんと管理すること。参考書：各自が「西洋音楽史」で使用した教科書や、M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）など。詳細は授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 西洋音楽史Ⅱ

**曜日時限**

水 3時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 1～ | 後期 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 60 | 0 | 0 | 0 | 40 | 100 |

## 教育到達目標と概要

本授業はメディア授業として開講される（全15回のうち8回をオンデマンド、7回を対面授業で実施する。詳細は授業展開と内容を確認のこと）。この授業では「西洋音楽史Ⅰ」の基礎知識をさらに深めるとともに、特に16世紀以前（中世・ルネサンス）と20世紀以降（近・現代）の音楽について理解し、音楽史に対する幅広い教養を身に付けることを目的とする。これらの時代の音楽は、コンクールや演奏会のレパートリー、さらには学校の鑑賞教材にも含まれており、その歴史的背景や時代様式を理解することは、教育者・演奏者を目指すためにも不可欠と

## 学修成果

16世紀以前（中世・ルネサンス）と20世紀以降（近・現代）の音楽について豊かな知識を得ることによって、西洋音楽史に対する新たな視座を獲得することが出来る。またそのことを通して、より深く時代様式を踏まえた解釈や演奏ができるようになる。

## 授業展開と内容

| | |
|---|---|
| 第1回 | 導入―西洋音楽史をより深く学ぶために（対面授業） |
| 第2回 | 中世の音楽（オンデマンド） |
| 第3回 | ルネサンスの音楽①（オンデマンド） |
| 第4回 | ルネサンスの音楽②―ミサ曲の変遷（対面授業） |
| 第5回 | バロックの音楽①―ナポリ派オペラ（対面授業） |
| 第6回 | バロックの音楽②―ソナタとコンチェルト（オンデマンド） |
| 第7回 | バロックから古典派へ―啓蒙思想とソナタ形式（オンデマンド） |
| 第8回 | 古典派の音楽①―モーツァルトのオペラと協奏曲（オンデマンド） |
| 第9回 | 古典派の音楽②―ベートーヴェンのピアノソナタを分析する（対面授業） |
| 第10回 | ロマン派の音楽①―ピアノと室内楽、そして歌曲（オンデマンド） |
| 第11回 | ロマン派の音楽②―オーケストラと国民楽派（オンデマンド） |
| 第12回 | 20世紀の音楽①―印象主義と表現主義、原始主義（対面授業） |
| 第13回 | 20世紀の音楽②―新古典主義とジャズ、12音技法（オンデマンド） |
| 第14回 | 20世紀の音楽③―ヨーロッパの前衛とアメリカの実験主義（対面授業） |
| 第15回 | 総括―なぜ西洋音楽史を学ぶのか（対面授業） |
| 第16回 | |
| 第17回 | |
| 第18回 | |
| 第19回 | |
| 第20回 | |
| 第21回 | |
| 第22回 | |
| 第23回 | |
| 第24回 | |
| 第25回 | |
| 第26回 | |
| 第27回 | |
| 第28回 | |
| 第29回 | |
| 第30回 | |

## 履修上の注意

本授業はメディア授業科目として開講される。対面授業となっている授業回については、教室で授業が行われるため出席すること。オンデマンドとなっている授業回については、以下のような手順による。1）Teamsにアップされている課題プリントを解く→2）「動画①解答と解説」を視聴する→3）「動画②本日のトピック」を

視聴する→4）Formsの小テストを実施して送信する。動画の視聴に際しては、指示された教科書のページを読むことが含まれる。4)のFormsについては、授業回の次の週の火曜日23:59までに送信すること。For

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

オンデマンドや対面授業にかかわらず、必ず毎回しっかりノートをとること。授業前には予習として、前回のノートおよび教科書を読み返すこと（30分）。また授業後は復習として、授業で取り上げられた作品の全曲を聴き直しながら（60分）、さらにその周辺についても積極的に多くの作品を聴くように努めること。

### 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、プリントをアップまたは配付するので各自ファイルしてきちんと管理すること。参考書：各自が「西洋音楽史」で使用した教科書や、M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）など。詳細は授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 器楽の歴史と作品　A

**曜日時限**

水 2時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 2～ | 通年 | 4 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 70 | 0 | 0 | 0 | 30 | 100 |

## 教育到達目標と概要

世界諸地域の多種多様な音楽の中でも、ヨーロッパの芸術音楽は、「器楽」が「声楽」と明確に区別され、独自の伝統と膨大なレパートリーを形成していることが特徴となっている。この授業では、西洋音楽史がなぜそのような特徴を持つのかを考えながら、古今のさまざまな器楽のレパートリーやジャンル、およびその成立の歴史について、系統的に学ぶ。概説的な「西洋音楽史」とはまた少し違った切り口で、より高度な勉強への第一歩となる専門知識を扱う。

## 学修成果

「ソナタ」、「シンフォニー」、「コンチェルト」などの身近な言葉の意味が、各時代でどのように変化していったのかなど、専門実技の勉強をより深め、演奏家となるための基本的な素養を身に付けることができる。また音楽の「形式」や「ジャンル」は、楽器の演奏習慣や社会の要求とどう結びついているのかを、説明することができるようになる。

## 授業展開と内容

第1回　西洋音楽史における「器楽」の概念――「器楽史」を学ぶにあたって

第2回　古代の楽器と音楽――「楽器」の持つ意味

第3回　中世・ルネサンス期の器楽①　楽器について

第4回　中世・ルネサンス期の器楽②　西洋音楽史における「器楽」の誕生――器楽の２つの系譜

第5回　中世・ルネサンス期の器楽③　多声の器楽曲の誕生

第6回　バロック期の器楽①　音楽史における「バロック」とは

第7回　バロック期の器楽②　楽器について

第8回　バロック期の器楽③　通奏低音とその実際

第9回　バロック期の器楽④　音楽の「場」とさまざまな演奏習慣

第10回　バロック期の器楽⑤　修辞学とアフェクテンレーレ

第11回　バロック期の器楽⑥　ジャンルと様式、音楽形式の概説（ソナタとコンチェルト）

第12回　バロック期の器楽⑦　イタリア・バロック

第13回　バロック期の器楽⑧　フランス・バロック

第14回　バロック期の器楽⑨　ドイツ・バロック

第15回　前期の総括と小テスト

第16回　前期小テストの解説、およびバロック期の器楽⑩　バッハの理想

第17回　18世紀（古典派）の器楽①　音楽史の転換期――18世紀の音楽概説と「前古典派」

第18回　18世紀（古典派）の器楽②　ソナタ形式とその発展

第19回　18世紀（古典派）の器楽③　ハイドン

第20回　18世紀（古典派）の器楽④　モーツァルト

第21回　18世紀（古典派）の器楽⑤　ベートーヴェン　交響曲第3番

第22回　18世紀（古典派）の器楽⑥　ベートーヴェン　交響曲第5番「運命」と第6番《田園》

第23回　19世紀の器楽①　交響曲

第24回　19世紀の器楽②　交響詩

第25回　19世紀の器楽③　協奏曲

第26回　19世紀の器楽④　室内楽

第27回　19世紀の器楽⑤　独奏曲

第28回　20世紀以降の器楽①　新しい形式の開拓

第29回　20世紀以降の器楽②　新しい音響の開拓

第30回　20世紀以降の器楽③　新しい奏法の開拓

### 履修上の注意

授業中にノートをしっかり取り、復習を必ずすること。授業進度は、受講者の理解度等の事情により上記区分とずれる可能性がある。初回には、受講上の約束事・評価方法・学修上の注意などの説明をするので、受講予定者は必ず出席のこと。

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業に先立ち、各自「西洋音楽史」の復習をすること（30分）。また取り上げた音楽作品については、授業内で聴ける部分は限られているので、図書館やナクソスなどを利用しながら、必ず全体を通して聴いてみること（60分）。

### 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、プリントを配付するので各自ファイルしてきちんと管理すること。参考書：各自が「西洋音楽史」で使用した教科書や、M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）など。詳細は授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 器楽の歴史と作品　A

**曜日時限**

水 2時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 2～ | 通年 | 4 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 70 | 0 | 0 | 0 | 30 | 100 |

## 教育到達目標と概要

世界諸地域の多種多様な音楽の中でも、ヨーロッパの芸術音楽は、「器楽」が「声楽」と明確に区別され、独自の伝統と膨大なレパートリーを形成していることが特徴となっている。この授業では、西洋音楽史がなぜそのような特徴を持つのかを考えながら、古今のさまざまな器楽のレパートリーやジャンル、およびその成立の歴史について、系統的に学ぶ。概説的な「西洋音楽史」とはまた少し違った切り口で、より高度な勉強への第一歩となる専門知識を扱う。

## 学修成果

「ソナタ」、「シンフォニー」、「コンチェルト」などの身近な言葉の意味が、各時代でどのように変化していったのかなど、専門実技の勉強をより深め、演奏家となるための基本的な素養を身に付けることができる。また音楽の「形式」や「ジャンル」は、楽器の演奏習慣や社会の要求とどう結びついているのかを、説明することができるようになる。

## 授業展開と内容

第1回　西洋音楽史における「器楽」の概念――「器楽史」を学ぶにあたって

第2回　古代の楽器と音楽――「楽器」の持つ意味

第3回　中世・ルネサンス期の器楽①　楽器について

第4回　中世・ルネサンス期の器楽②　西洋音楽史における「器楽」の誕生――器楽の２つの系譜

第5回　中世・ルネサンス期の器楽③　多声の器楽曲の誕生

第6回　バロック期の器楽①　音楽史における「バロック」とは

第7回　バロック期の器楽②　楽器について

第8回　バロック期の器楽③　通奏低音とその実際

第9回　バロック期の器楽④　音楽の「場」とさまざまな演奏習慣

第10回　バロック期の器楽⑤　修辞学とアフェクテンレーレ

第11回　バロック期の器楽⑥　ジャンルと様式、音楽形式の概説（ソナタとコンチェルト）

第12回　バロック期の器楽⑦　イタリア・バロック

第13回　バロック期の器楽⑧　フランス・バロック

第14回　バロック期の器楽⑨　ドイツ・バロック

第15回　前期の総括と小テスト

第16回　前期小テストの解説、およびバロック期の器楽⑩　バッハの理想

第17回　18世紀（古典派）の器楽①　音楽史の転換期――18世紀の音楽概説と「前古典派」

第18回　18世紀（古典派）の器楽②　ソナタ形式とその発展

第19回　18世紀（古典派）の器楽③　ハイドン

第20回　18世紀（古典派）の器楽④　モーツァルト

第21回　18世紀（古典派）の器楽⑤　ベートーヴェン　交響曲第3番

第22回　18世紀（古典派）の器楽⑥　ベートーヴェン　交響曲第5番「運命」と第6番《田園》

第23回　19世紀の器楽①　交響曲

第24回　19世紀の器楽②　交響詩

第25回　19世紀の器楽③　協奏曲

第26回　19世紀の器楽④　室内楽

第27回　19世紀の器楽⑤　独奏曲

第28回　20世紀以降の器楽①　新しい形式の開拓

第29回　20世紀以降の器楽②　新しい音響の開拓

第30回　20世紀以降の器楽③　新しい奏法の開拓

### 履修上の注意

授業中にノートをしっかり取り、復習を必ずすること。授業進度は、受講者の理解度等の事情により上記区分とずれる可能性がある。初回には、受講上の約束事・評価方法・学修上の注意などの説明をするので、受講予定者は必ず出席のこと。

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業に先立ち、各自「西洋音楽史」の復習をすること（30分）。また取り上げた音楽作品については、授業内で聴ける部分は限られているので、図書館やナクソスなどを利用しながら、必ず全体を通して聴いてみること（60分）。

### 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、プリントを配付するので各自ファイルしてきちんと管理すること。参考書：各自が「西洋音楽史」で使用した教科書や、M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）など。詳細は授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 器楽の歴史と作品

音楽と社会Ａ

**曜日時限**

水 2時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 1～ | 通年 | 4 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 70 | 0 | 0 | 0 | 30 | 100 |

## 教育到達目標と概要

世界諸地域の多種多様な音楽の中でも、ヨーロッパの芸術音楽は、「器楽」が「声楽」と明確に区別され、独自の伝統と膨大なレパートリーを形成していることが特徴となっている。この授業では、西洋音楽史がなぜそのような特徴を持つのかを考えながら、古今のさまざまな器楽のレパートリーやジャンル、およびその成立の歴史について、系統的に学ぶ。概説的な「西洋音楽史」とはまた少し違った切り口で、より高度な勉強への第一歩となる専門知識を扱う。

## 学修成果

「ソナタ」、「シンフォニー」、「コンチェルト」などの身近な言葉の意味が、各時代でどのように変化していったのかなど、専門実技の勉強をより深め、演奏家となるための基本的な素養を身に付けることができる。また音楽の「形式」や「ジャンル」は、楽器の演奏習慣や社会の要求とどう結びついているのかを、説明することができるようになる。

## 授業展開と内容

第1回　西洋音楽史における「器楽」の概念――「器楽史」を学ぶにあたって

第2回　古代の楽器と音楽――「楽器」の持つ意味

第3回　中世・ルネサンス期の器楽①　楽器について

第4回　中世・ルネサンス期の器楽②　西洋音楽史における「器楽」の誕生――器楽の２つの系譜

第5回　中世・ルネサンス期の器楽③　多声の器楽曲の誕生

第6回　バロック期の器楽①　音楽史における「バロック」とは

第7回　バロック期の器楽②　楽器について

第8回　バロック期の器楽③　通奏低音とその実際

第9回　バロック期の器楽④　音楽の「場」とさまざまな演奏習慣

第10回　バロック期の器楽⑤　修辞学とアフェクテンレーレ

第11回　バロック期の器楽⑥　ジャンルと様式、音楽形式の概説（ソナタとコンチェルト）

第12回　バロック期の器楽⑦　イタリア・バロック

第13回　バロック期の器楽⑧　フランス・バロック

第14回　バロック期の器楽⑨　ドイツ・バロック

第15回　前期の総括と小テスト

第16回　前期小テストの解説、およびバロック期の器楽⑩　バッハの理想

第17回　18世紀（古典派）の器楽①　音楽史の転換期――18世紀の音楽概説と「前古典派」

第18回　18世紀（古典派）の器楽②　ソナタ形式とその発展

第19回　18世紀（古典派）の器楽③　ハイドン

第20回　18世紀（古典派）の器楽④　モーツァルト

第21回　18世紀（古典派）の器楽⑤　ベートーヴェン　交響曲第3番

第22回　18世紀（古典派）の器楽⑥　ベートーヴェン　交響曲第5番「運命」と第6番《田園》

第23回　19世紀の器楽①　交響曲

第24回　19世紀の器楽②　交響詩

第25回　19世紀の器楽③　協奏曲

第26回　19世紀の器楽④　室内楽

第27回　19世紀の器楽⑤　独奏曲

第28回　20世紀以降の器楽①　新しい形式の開拓

第29回　20世紀以降の器楽②　新しい音響の開拓

第30回　20世紀以降の器楽③　新しい奏法の開拓

### 履修上の注意

授業中にノートをしっかり取り、復習を必ずすること。授業進度は、受講者の理解度等の事情により上記区分とずれる可能性がある。初回には、受講上の約束事・評価方法・学修上の注意などの説明をするので、受講予定者は必ず出席のこと。

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

毎回の授業に先立ち、各自「西洋音楽史」の復習をすること（30分）。また取り上げた音楽作品については、授業内で聴ける部分は限られているので、図書館やナクソスなどを利用しながら、必ず全体を通して聴いてみること（60分）。

### 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、プリントを配付するので各自ファイルしてきちんと管理すること。参考書：各自が「西洋音楽史」で使用した教科書や、M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）など。詳細は授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 音楽美学　B

**曜日時限**

月 3時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 3～ | 通年 | 4 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

音楽美学は、「音楽や芸術についての考え方」を学ぶ科目です。
音楽とは何か、という考え方は時代によって全く異なっており、社会や、人々の音楽生活、楽器や作曲技法の変化とともに移り変わっていきます。
授業では、古代から現代までの「音楽や芸術についての考え方」の変化をたどりながら、そこから私たちはどのようなヒントが得られるか、演奏や創作の表現あるいは音楽の楽しみ方にどのように生かせるかを考えていきます。その際、音楽史はもちろん、ヨーロッパ文化史・精神史などの知識も参照し、さまざまな音楽の思想が実際の音楽にどのように表われているかを学びます。
音楽家として社会に出て行く前に、先人の考え方に刺激を受け、ぜひ自分と音楽とのかかわりをじっくり考える機会にしてください。

## 学修成果

音楽の歴史を、「西洋音楽史」とは異なる視点から、つまり人間の「音楽観」の歴史として学ぶことができる。
日常的に接する音楽作品の背景にあるものを、深く理解することができる。またそれを通じて、現代の私たち自身が、どのように音楽と向き合うべきか、それを考える「手がかり」を得ることができる。
さらには提示された課題について、考えをまとめ、論理的に記述する技術を身につけることができる。

## 授業展開と内容

第1回　音楽美学への招待
～「音楽美学」とはどのような学問か

第2回　古代ヨーロッパの芸術論①　ギリシア神話にみる古代の芸術観
～「調和の学問」としての音楽

第3回　古代ヨーロッパの芸術論②　ギリシャの学問と芸術観
～万物の根源と本質への問い

第4回　古代ヨーロッパの芸術論③　プラトンとアリストテレスの芸術観
～「表現」とは何か／芸術の２つのモデルと「表現」の意味

第5回　古代ヨーロッパの芸術論④　音楽文化におけるヘレニズム、ヘブライズムとその影響
～ギリシャ・ローマ的なものとヘブライ的なものの葛藤／キケローとクィンティリアヌスの修辞学

第6回　中世ヨーロッパの芸術論①　キリスト教世界と中世の音楽観

第7回　中世ヨーロッパの芸術論②　新プラトン主義と芸術
～プラトンの継承とキリスト的世界観との葛藤

第8回　中世ヨーロッパの芸術論③　中世の音楽観
～アウグスティヌス／ボエティウスと「ムシカ」の概念／「音楽家」とは

第9回　中世ヨーロッパの芸術論④　アリストテレスの復権と新しい芸術論
～「学問」から「アート（技術）」へ

第10回　ルネサンス・バロック期の芸術論①　ルネサンスの理想と芸術
～「ルネサンス」の概念と理想郷としての「古代ギリシャ」

第11回　ルネサンス・バロック期の芸術論②　ルネサンスの音楽理論家たち
～音楽における「理論」と「実践」

第12回　ルネサンス・バロック期の芸術論③　音楽は何を表現するか
～音楽の本質と鳴り響きについての壮大な物語

第13回　ルネサンス・バロック期の芸術論④　「アフェクト」と「フィグール」の実際
～音楽を読み解く秘密を知ろう

第14回　ルネサンス・バロック期の芸術論⑤　「感情」の学としての音楽と音楽修辞法
～修辞的表現は究極的に何を伝えているのか／「アフェクテンレーレ」と「フィグーレンレーレ」／ムシカ・レセルヴァータ（とっておきの音楽）の概念

第15回　まとめ

第16回　18世紀の芸術論①　音楽史の新しい時代と教養ある音楽家
～マッテゾンと調性格論

第17回　18世紀の芸術論②　「理性」と「感覚」
～人はどのようにして「美」を知るか

第18回　18世紀の芸術論③　芸術における「自然」とは

| | |
|---|---|
| | ～「自然」は芸術の源泉か、ライバルか |
| 第19回 | 18世紀の芸術論④　啓蒙思想と芸術家たち<br>～市民の社会における芸術の役割 |
| 第20回 | 19世紀の芸術論①　ロマン主義とは何か<br>～「ノスタルジー」の思想と芸術 |
| 第21回 | 19世紀の芸術論②　芸術における「偉大さ」<br>～社会が芸術に求めるもの |
| 第22回 | 19世紀の芸術論③　ヘーゲルの思想とベートーヴェン<br>～革命の時代における「変化」と「発展」の概念 |
| 第23回 | 19世紀の芸術論④　歴史主義と芸術<br>～「過去」が作る価値 |
| 第24回 | 19世紀の芸術論⑤　絶対音楽と標題音楽<br>～音楽の「意味」とは…音楽の「うち」と「そと」、自律と他律の概念／「音そのもの」という思想とその歴史的背景 |
| 第25回 | 19世紀の芸術論⑥　ショーペンハウアーの思想とヴァグナー<br>～「未来」への投企 |
| 第26回 | 20世紀と現代の芸術論①　世界観の変化と芸術の価値<br>～脱－中心化する芸術 |
| 第27回 | 20世紀と現代の芸術論②　「表現すること」から「聴くこと」へ |
| 第28回 | 20世紀と現代の芸術論③　非西洋の音楽思想<br>～ジョン・ケージの思想と音楽 |
| 第29回 | 20世紀と現代の芸術論④　非西洋の音楽思想<br>～武満徹の音楽観と作品／東洋の音楽家たちの音楽観と作品 |
| 第30回 | まとめ |

## 履修上の注意

「自分はこの授業で何を学びに来たのか」という問題意識を常に持って授業に臨むことが重要。ノートをしっかり取り、復習を必ず行うこと。
授業進度は、受講者の理解度等や、内容の進展により上記区分とずれる可能性がある。
初回には、学びの出発点となる課題を出題するので、受講予定者は必ず出席のこと。

## 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

音楽美学を学ぶためには、基本的な音楽史の知識はもちろんのこと、さまざまなジャンルの作品についての知識、そして何より音楽家としての経験や問題意識が自分自身の中で深まっていることが必要である。授業には、各自が問題意識や「問いかけ」をもって臨み、また授業で学んだことを、常に自分自身の専門の学びに照らして考えるように心がけること。科目の性格上、授業内はもちろん、授業外の時間に「常に考えること」が求められる。
最も重要なことは、その日の授業で学んだ事柄の中で、自分にとって印書的だったこと、もっと知りたいと思ったこ

## 教科書・参考書

教科書は指定せず、必要に応じて資料を配付する。各自ファイルしてきちんと管理すること。
そのほかは、授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 音楽美学　　音楽と社会Ｂ

**曜日時限**

月 3時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 2～ | 通年 | 4 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

音楽美学は、「音楽や芸術についての考え方」を学ぶ科目です。
音楽とは何か、という考え方は時代によって全く異なっており、社会や、人々の音楽生活、楽器や作曲技法の変化とともに移り変わっていきます。
授業では、古代から現代までの「音楽や芸術についての考え方」の変化をたどりながら、そこから私たちはどのようなヒントが得られるか、演奏や創作の表現あるいは音楽の楽しみ方にどのように生かせるかを考えていきます。その際、音楽史はもちろん、ヨーロッパ文化史・精神史などの知識も参照し、さまざまな音楽の思想が実際の音楽にどの

## 学修成果

音楽の歴史を、「西洋音楽史」とは異なる視点から、つまり人間の「音楽観」の歴史として学ぶことができる。
日常的に接する音楽作品の背景にあるものを、深く理解することができる。またそれを通じて、現代の私たち自身が、どのように音楽と向き合うべきか、それを考える「手がかり」を得ることができる。
さらには提示された課題について、考えをまとめ、論理的に記述する技術を身につけることができる。

## 授業展開と内容

第1回　音楽美学への招待
～「音楽美学」とはどのような学問か

第2回　古代ヨーロッパの芸術論①　ギリシア神話にみる古代の芸術観
～「調和の学問」としての音楽

第3回　古代ヨーロッパの芸術論②　ギリシャの学問と芸術観
～万物の根源と本質への問い

第4回　古代ヨーロッパの芸術論③　プラトンとアリストテレスの芸術観
～「表現」とは何か／芸術の２つのモデルと「表現」の意味

第5回　古代ヨーロッパの芸術論④　音楽文化におけるヘレニズム、ヘブライズムとその影響
～ギリシャ・ローマ的なものとヘブライ的なものの葛藤／キケローとクィンティリアヌスの修辞学

第6回　中世ヨーロッパの芸術論①　キリスト教世界と中世の音楽観

第7回　中世ヨーロッパの芸術論②　新プラトン主義と芸術
～プラトンの継承とキリスト的世界観との葛藤

第8回　中世ヨーロッパの芸術論③　中世の音楽観
～アウグスティヌス／ボエティウスと「ムシカ」の概念／「音楽家」とは

第9回　中世ヨーロッパの芸術論④　アリストテレスの復権と新しい芸術論
～「学問」から「アート（技術）」へ

第10回　ルネサンス・バロック期の芸術論①　ルネサンスの理想と芸術
～「ルネサンス」の概念と理想郷としての「古代ギリシャ」

第11回　ルネサンス・バロック期の芸術論②　ルネサンスの音楽理論家たち
～音楽における「理論」と「実践」

第12回　ルネサンス・バロック期の芸術論③　音楽は何を表現するか
～音楽の本質と鳴り響きについての壮大な物語

第13回　ルネサンス・バロック期の芸術論④　「アフェクト」と「フィグール」の実際
～音楽を読み解く秘密を知ろう

第14回　ルネサンス・バロック期の芸術論⑤　「感情」の学としての音楽と音楽修辞法
～修辞的表現は究極的に何を伝えているのか／「アフェクテンレーレ」と「フィグーレンレーレ」／ムシカ・レセルヴァータ（とっておきの音楽）の概念

第15回　まとめ

第16回　18世紀の芸術論①　音楽史の新しい時代と教養ある音楽家
～マッテゾンと調性格論

第17回　18世紀の芸術論②　「理性」と「感覚」
～人はどのようにして「美」を知るか

第18回　18世紀の芸術論③　芸術における「自然」とは
～「自然」は芸術の源泉か、ライバルか

第19回　18世紀の芸術論④　啓蒙思想と芸術家たち
～市民の社会における芸術の役割

第20回　19世紀の芸術論①　ロマン主義とは何か
～「ノスタルジー」の思想と芸術

第21回　19世紀の芸術論②　芸術における「偉大さ」
～社会が芸術に求めるもの

第22回　19世紀の芸術論③　ヘーゲルの思想とベートーヴェン
～革命の時代における「変化」と「発展」の概念

第23回　19世紀の芸術論④　歴史主義と芸術
～「過去」が作る価値

第24回　19世紀の芸術論⑤　絶対音楽と標題音楽
～音楽の「意味」とは…音楽の「うち」と「そと」、自律と他律の概念／「音そのもの」という思想とその歴史的背景

第25回　19世紀の芸術論⑥　ショーペンハウアーの思想とヴァグナー
～「未来」への投企

第26回　20世紀と現代の芸術論①　世界観の変化と芸術の価値
～脱－中心化する芸術

第27回　20世紀と現代の芸術論②　「表現すること」から「聴くこと」へ

第28回　20世紀と現代の芸術論③　非西洋の音楽思想
～ジョン・ケージの思想と音楽

第29回　20世紀と現代の芸術論④　非西洋の音楽思想
～武満徹の音楽観と作品／東洋の音楽家たちの音楽観と作品

第30回　まとめ

## 履修上の注意

「自分はこの授業で何を学びに来たのか」という問題意識を常に持って授業に臨むことが重要。ノートをしっかり取り、復習を必ず行うこと。
授業進度は、受講者の理解度等や、内容の進展により上記区分とずれる可能性がある。
初回には、学びの出発点となる課題を出題するので、受講予定者は必ず出席のこと。

## 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

音楽美学を学ぶためには、基本的な音楽史の知識はもちろんのこと、さまざまなジャンルの作品についての知識、そして何より音楽家としての経験や問題意識が自分自身の中で深まっていることが必要である。授業には、各自が問題意識や「問いかけ」をもって臨み、また授業で学んだことを、常に自分自身の専門の学びに照らして考えるように心がけること。科目の性格上、授業内はもちろん、授業外の時間に「常に考えること」が求められる。
最も重要なことは、その日の授業で学んだ事柄の中で、自分にとって印書的だったこと、もっと知りたいと思ったこ

## 教科書・参考書

教科書は指定せず、必要に応じて資料を配付する。各自ファイルしてきちんと管理すること。
そのほかは、授業で紹介する。

科目名－クラス名

# 音楽基礎演習

**アートマ舞スタ以外E**

曜日時限

木 2時限

担当教員

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 演習 | 1～ | 通年 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 70 | 0 | 0 | 0 | 30 | 100 |

## 教育到達目標と概要

実際の音楽にかかわる場面に必要な、主として楽典の最も基礎的な知識を学び、技術・理論的な側面からのアプローチで音楽のルールと理論を身につける。そのことを通して、これから音楽を専門的に勉強していくための基礎力を獲得する。授業では、トピックごとに演習を行い、さまざまな面から理論を理解しながら、実際に役立つ力を養うことをめざす。

## 学修成果

楽典の基礎が身に付く。音楽を理論的に理解できるようになる。『ハーモニー演習①』へとスムーズに移行できる理論を身に付けることができる。

## 授業展開と内容

第1回　ガイダンス

第2回　譜表、音名、変化記号とその効力

第3回　音符と休符

第4回　拍子とリズム

第5回　音程①：単音程

第6回　音程②：単音程と複音程

第7回　音程③：転回音程

第8回　発想記号、省略記号、その他の記号

第9回　長音階①：音階の仕組み

第10回　長音階②：シャープ系の音階

第11回　長音階③：フラット系の音階

第12回　長音階④：5度圏

第13回　総復習①：リズムと音程を中心に

第14回　総復習②：長音階を中心に、小テスト

第15回　小テストの解説

第16回　前期の復習と後期のガイダンス

第17回　短音階①：音階の仕組み

第18回　短音階②：シャープ系の音階

第19回　短音階③：フラットの音階

第20回　短音階④：5度圏

第21回　近親調について

第22回　調判定

第23回　調判定と移調

第24回　和音①：３和音の種類とコードネーム

第25回　和音②：7の和音の種類とコードネーム

第26回　和音③：音階と和音（長調）

第27回　和音④：音階と和音（短調）

第28回　総復習①：調判定と移調、和音を中心に

第29回　総復習②：総合問題に取り組む

第30回　総復習③：総合問題の解説とまとめ

## 履修上の注意

授業に積極的に参加すること。教科書と五線紙を持参すること。

## 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習として、あらかじめ教科書の指示された項目を読んでくること（15分）。授業の内容を繰り返し復習すること（45分）。さらに授業で学んだ知識を、常にレッスンなどの実技で触れる楽曲で確認するよう心掛けてください。

## 教科書・参考書

教科書：『実践　楽譜がよめる！大人のための音楽ワーク　テキスト』（ヤマハミュージックメディアコーポレーション）。その他、適宜プリントなどを配付する。

科目名－クラス名

# 音楽基礎演習　C

**曜日時限**

木 2時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 演習 | 1～ | 通年 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 70 | 0 | 0 | 0 | 30 | 100 |

## 教育到達目標と概要

実際の音楽にかかわる場面に必要な、主として楽典の最も基礎的な知識を学び、技術・理論的な側面からのアプローチで音楽のルールと理論を身につける。そのことを通して、これから音楽を専門的に勉強していくための基礎力を獲得する。授業では、トピックごとに演習を行い、さまざまな面から理論を理解しながら、実際に役立つ力を養うことをめざす。

## 学修成果

楽典の基礎が身に付く。音楽を理論的に理解できるようになる。『ハーモニー演習①』へとスムーズに移行できる理論を身に付けることができる。

## 授業展開と内容

第1回　ガイダンス

第2回　譜表、音名、変化記号とその効力

第3回　音符と休符

第4回　拍子とリズム

第5回　音程①：単音程

第6回　音程②：単音程と複音程

第7回　音程③：転回音程

第8回　発想記号、省略記号、その他の記号

第9回　長音階①：音階の仕組み

第10回　長音階②：シャープ系の音階

第11回　長音階③：フラット系の音階

第12回　長音階④：5度圏

第13回　総復習①：リズムと音程を中心に

第14回　総復習②：長音階を中心に、小テスト

第15回　小テストの解説

第16回　前期の復習と後期のガイダンス

第17回　短音階①：音階の仕組み

第18回　短音階②：シャープ系の音階

第19回　短音階③：フラットの音階

第20回　短音階④：5度圏

第21回　近親調について

第22回　調判定

第23回　調判定と移調

第24回　和音①：３和音の種類とコードネーム

第25回　和音②：7の和音の種類とコードネーム

第26回　和音③：音階と和音（長調）

第27回　和音④：音階と和音（短調）

第28回　総復習①：調判定と移調、和音を中心に

第29回　総復習②：総合問題に取り組む

第30回　総復習③：総合問題の解説とまとめ

### 履修上の注意

授業に積極的に参加すること。教科書と五線紙を持参すること。

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習として、あらかじめ教科書の指示された項目を読んでくること（15分）。授業の内容を繰り返し復習すること（45分）。さらに授業で学んだ知識を、常にレッスンなどの実技で触れる楽曲で確認するよう心掛けてください。

### 教科書・参考書

教科書：『実践　楽譜がよめる！大人のための音楽ワーク　テキスト』（ヤマハミュージックメディアコーポレーション）。その他、適宜プリントなどを配付する。

科目名－クラス名

# 西洋音楽史特殊講義

**曜日時限**

火 3時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 1～ | 前期 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 100 | 0 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

音楽を専門的に学ぶ者にとって、西洋音楽史に関する理解は必要不可欠なものであり、とりわけ高度な学びの場である大学院においては、より確実で整理された知識が求められる。本授業では西洋音楽史の流れを、文化的・社会的背景と具体的な作品とともに振り返りながら、それぞれの時代に特徴的な音楽を楽しむと同時に、歴史的に系統立てて把握する力を強化することを目標とする。

## 学修成果

①音楽が生まれた時代背景と様式の変遷について、明確に理解し説明できるようになる。
②様々な特徴を持つ音楽について、歴史的視点から体系的に考察できるようになる。

## 授業展開と内容

| | |
|---|---|
| 第1回 | 導入：西洋音楽史を学ぶ意義とは＆プレイスメント試験（王＆石川クラスを除く） |
| 第2回 | 中世の社会と音楽 |
| 第3回 | ルネサンスの社会と音楽 |
| 第4回 | バロックの社会と音楽①：絶対主義と貴族社会 |
| 第5回 | バロックの社会と音楽②：オペラの誕生と展開 |
| 第6回 | バロックの社会と音楽③：コンチェルト、ソナタ |
| 第7回 | 古典派の社会と音楽①：啓蒙思想とソナタ形式 |
| 第8回 | 古典派の社会と音楽②：交響曲、弦楽四重奏曲、ソナタ |
| 第9回 | 古典派の社会と音楽③：グルックのオペラ改革とモーツァルト |
| 第10回 | ソナタロマン派の社会と音楽①：フランス革命と市民社会 |
| 第11回 | ロマン派の社会と音楽②：オーケストラ、ピアノ |
| 第12回 | ロマン派の社会と音楽③：オペラ、歌曲 |
| 第13回 | 近現代の社会と音楽①：ドビュッシー、ストラヴィンスキーとシェーンベルク |
| 第14回 | 近現代の社会と音楽②：前衛主義と実験主義 |
| 第15回 | 総括：再び、西洋音楽史を学ぶ意義とは |
| 第16回 | |
| 第17回 | |
| 第18回 | |
| 第19回 | |
| 第20回 | |
| 第21回 | |
| 第22回 | |
| 第23回 | |
| 第24回 | |
| 第25回 | |
| 第26回 | |
| 第27回 | |
| 第28回 | |
| 第29回 | |
| 第30回 | |

## 履修上の注意

2019年度入学者から、両専攻とも必修科目となるので注意すること。留学生は王＆石川クラスを履修すること。留学生以外の履修者については、第1回の授業内でプレイスメント試験を実施し、結果に従ってクラス指定を行う。

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業内で鑑賞できる作品や部分は限られているので、図書館などを活用し、各自で楽譜および音源や映像資料を入手して、積極的に様々な音楽に触れていくこと（60分）。その際、授業の内容をよく復習し、アカデミックに音楽と向き合う態度を心がけて欲しい。

### 教科書・参考書

教科書：岸本宏子ほか著『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』（アルテスパブリッシング）。その他、適宜、授業内でプリントを配付するので、各自で管理すること。
参考書：M. カッロッツォほか著『西洋音楽の歴史』全3巻（シーライト・パブリッシング）。その他、授業内でも紹介する。

科目名－クラス名

# 課題研究Ⅰ

**曜日時限**

火 1時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 演習 | 2～ | 通年 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 0 | 100 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得するこ

## 学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

## 授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定①　修士論文題目の提出に向けた指導

第2回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定②　修士論文執筆計画書の提出に向けた指導

第3回　論文執筆の予備的作業①　文献表の完成と基礎知識の整理

第4回　論文執筆の予備的作業②　文献・資料の選定

第5回　論文執筆の予備的作業③　論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと

第6回　論文執筆①　序論の書き方

第7回　論文執筆②　序論の執筆

第8回　（以下、３章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。４章立ての場合もこれに準じて計画する）
論文執筆③　第１章のための文献を読む

第9回　論文執筆④　第１章の執筆

第10回　論文執筆⑤　第１章の推敲

第11回　論文執筆⑥　第２章のための文献を読む

第12回　論文執筆⑦　第２章の執筆

第13回　論文執筆⑧　第２章の推敲

第14回　中間発表の準備①　中間発表にむけて、発表原稿作成

第15回　１．中間発表の準備②　中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習２．夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）

第16回　中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認

第17回　論文執筆⑨　第３章のための文献や資料を整理する

第18回　論文執筆⑩　第３章の執筆

第19回　論文執筆⑪　第３章の推敲

第20回　論文執筆⑫　その他の部分の執筆と推敲

第21回　論文執筆⑬　結論の書き方

第22回　論文執筆⑭　結論の執筆と推敲

第23回　論文執筆⑮　序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し

第24回　論文執筆⑯　参考文献表を整える

第25回　論文執筆⑰　書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、譜例や図版のキャプション等の確認）

第26回　論文執筆⑱　体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）

第27回　論文執筆⑲　論文要旨を執筆する

第28回　提出前の最終確認　論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

| | |
|---|---|
| 第29回 | 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認 |
| 第30回 | 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　本文と要旨およびその他提出物の再確認 |

### 履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「研究倫理ガイダンス」への参加
③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

### 教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

# 課題研究Ⅰ

**曜日時限**

木 1時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 演習 | 2～ | 通年 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 0 | 100 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得するこ

## 学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

## 授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定①　修士論文題目の提出に向けた指導

第2回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定②　修士論文執筆計画書の提出に向けた指導

第3回　論文執筆の予備的作業①　文献表の完成と基礎知識の整理

第4回　論文執筆の予備的作業②　文献・資料の選定

第5回　論文執筆の予備的作業③　論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと

第6回　論文執筆①　序論の書き方

第7回　論文執筆②　序論の執筆

第8回　（以下、３章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。４章立ての場合もこれに準じて計画する）
論文執筆③　第１章のための文献を読む

第9回　論文執筆④　第１章の執筆

第10回　論文執筆⑤　第１章の推敲

第11回　論文執筆⑥　第２章のための文献を読む

第12回　論文執筆⑦　第２章の執筆

第13回　論文執筆⑧　第２章の推敲

第14回　中間発表の準備①　中間発表にむけて、発表原稿作成

第15回　１．中間発表の準備②　中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習２．夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）

第16回　中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認

第17回　論文執筆⑨　第３章のための文献や資料を整理する

第18回　論文執筆⑩　第３章の執筆

第19回　論文執筆⑪　第３章の推敲

第20回　論文執筆⑫　その他の部分の執筆と推敲

第21回　論文執筆⑬　結論の書き方

第22回　論文執筆⑭　結論の執筆と推敲

第23回　論文執筆⑮　序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し

第24回　論文執筆⑯　参考文献表を整える

第25回　論文執筆⑰　書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、譜例や図版のキャプション等の確認）

第26回　論文執筆⑱　体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）

第27回　論文執筆⑲　論文要旨を執筆する

第28回　提出前の最終確認　論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

| | |
|---|---|
| 第29回 | 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認 |
| 第30回 | 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　本文と要旨およびその他提出物の再確認 |

### 履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「研究倫理ガイダンス」への参加
③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

### 教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

# 課題研究Ⅰ

**曜日時限**

火 1時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 演習 | 2～ | 通年 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 0 | 100 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得するこ

## 学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

## 授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定①　修士論文題目の提出に向けた指導

第2回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定②　修士論文執筆計画書の提出に向けた指導

第3回　論文執筆の予備的作業①　文献表の完成と基礎知識の整理

第4回　論文執筆の予備的作業②　文献・資料の選定

第5回　論文執筆の予備的作業③　論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと

第6回　論文執筆①　序論の書き方

第7回　論文執筆②　序論の執筆

第8回　（以下、３章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。４章立ての場合もこれに準じて計画する）
論文執筆③　第１章のための文献を読む

第9回　論文執筆④　第１章の執筆

第10回　論文執筆⑤　第１章の推敲

第11回　論文執筆⑥　第２章のための文献を読む

第12回　論文執筆⑦　第２章の執筆

第13回　論文執筆⑧　第２章の推敲

第14回　中間発表の準備①　中間発表にむけて、発表原稿作成

第15回　１．中間発表の準備②　中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習２．夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）

第16回　中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認

第17回　論文執筆⑨　第３章のための文献や資料を整理する

第18回　論文執筆⑩　第３章の執筆

第19回　論文執筆⑪　第３章の推敲

第20回　論文執筆⑫　その他の部分の執筆と推敲

第21回　論文執筆⑬　結論の書き方

第22回　論文執筆⑭　結論の執筆と推敲

第23回　論文執筆⑮　序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し

第24回　論文執筆⑯　参考文献表を整える

第25回　論文執筆⑰　書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、譜例や図版のキャプション等の確認）

第26回　論文執筆⑱　体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）

第27回　論文執筆⑲　論文要旨を執筆する

第28回　提出前の最終確認　論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

| | |
|---|---|
| 第29回 | 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認 |
| 第30回 | 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　本文と要旨およびその他提出物の再確認 |

### 履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「研究倫理ガイダンス」への参加
③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

### 教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

# 課題研究Ⅰ

**曜日時限**

木 1時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 演習 | 2～ | 通年 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 0 | 100 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得するこ

## 学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

## 授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定①　修士論文題目の提出に向けた指導

第2回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定②　修士論文執筆計画書の提出に向けた指導

第3回　論文執筆の予備的作業①　文献表の完成と基礎知識の整理

第4回　論文執筆の予備的作業②　文献・資料の選定

第5回　論文執筆の予備的作業③　論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと

第6回　論文執筆①　序論の書き方

第7回　論文執筆②　序論の執筆

第8回　（以下、３章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。４章立ての場合もこれに準じて計画する）
論文執筆③　第１章のための文献を読む

第9回　論文執筆④　第１章の執筆

第10回　論文執筆⑤　第１章の推敲

第11回　論文執筆⑥　第２章のための文献を読む

第12回　論文執筆⑦　第２章の執筆

第13回　論文執筆⑧　第２章の推敲

第14回　中間発表の準備①　中間発表にむけて、発表原稿作成

第15回　１．中間発表の準備②　中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習２．夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）

第16回　中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認

第17回　論文執筆⑨　第３章のための文献や資料を整理する

第18回　論文執筆⑩　第３章の執筆

第19回　論文執筆⑪　第３章の推敲

第20回　論文執筆⑫　その他の部分の執筆と推敲

第21回　論文執筆⑬　結論の書き方

第22回　論文執筆⑭　結論の執筆と推敲

第23回　論文執筆⑮　序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し

第24回　論文執筆⑯　参考文献表を整える

第25回　論文執筆⑰　書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、譜例や図版のキャプション等の確認）

第26回　論文執筆⑱　体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）

第27回　論文執筆⑲　論文要旨を執筆する

第28回　提出前の最終確認　論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

| | |
|---|---|
| 第29回 | 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認 |
| 第30回 | 口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　本文と要旨およびその他提出物の再確認 |

### 履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「研究倫理ガイダンス」への参加
③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

### 教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

# 課題研究Ⅲ

曜日時限

火 1時限

担当教員

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 演習 | 2～ | 前期 | 1 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 0 | 100 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士研究（2,000～3,000字程度）を執筆し、その内容について15分程度の口頭によるプレゼンテーションを行う。
◆修士研究（Ⅲ）では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいた具体的なテーマを設定し、それについての調査・論考を文章にまとめるとともに、説得力のある効果的な口頭プレゼンテーションを行うことが求められる。例えば修了演奏の主たる曲目についての楽曲分析や演奏解釈、修了作品の制作過程の記録と検証などが適している。
◆この授業では、担当教員の個別指

## 学修成果

執筆の過程を通じて、学術的な研究に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
口頭によるプレゼンテーションの資料を作成することにより、様々なプレゼンテーション・ツールを使いこなすことができるようになる。
執筆・口頭発表・口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

## 授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と研究タイトルの決定
～修士研究題目および修士研究執筆計画書の提出に向けた指導

第2回　執筆の予備的作業①　基礎知識の整理と必要な資料のリストアップ

第3回　執筆の予備的作業②　研究の構想を練り、全体の論旨と構成、プレゼンテーションの方法を考える／研究倫理審査（「履修上の注意」を参照）の要・不要の確認

第4回　執筆①　導入の書き方・導入部の執筆

第5回　（以下、三部構成の場合を例にしている。他の構成の場合もこれに準ずる）
執筆②　第１の部分の執筆

第6回　執筆③　第１の部分の推敲

第7回　執筆④　第２の部分の執筆

第8回　執筆⑤　第２の部分の推敲

第9回　執筆⑥　第３の部分（結論）の執筆

第10回　執筆⑧　第３の部分（結論）の推敲、および全体の論旨の確認と見直し

第11回　プレゼンテーションの準備①　効果的なプレゼンテーションのポイントを考える

第12回　プレゼンテーションの準備②　プレゼンテーションの素材を作成する

第13回　プレゼンテーションの準備③　プレゼンテーションの練習とフィードバック、およびディスカッション

第14回　執筆⑨　要旨を執筆する

第15回　提出前の最終確認　本文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

## 履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士研究を執筆する年度当初に「修士研究執筆計画書」の提出、「修士研究題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆研究の執筆に当たっては研究倫理に留意し

## 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「図書館ガイダンス」への参加
③「研究倫理ガイダンス」への参加
④口頭試問で指摘を受け

## 教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文・レポートの執筆から文献表記法まで』（改訂新版）春秋社刊

科目名－クラス名

# 課題研究Ⅲ

曜日時限

木 1時限

担当教員

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 演習 | 2～ | 前期 | 1 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 0 | 100 | 0 | 0 | 0 | 100 |

## 教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士研究（2,000～3,000字程度）を執筆し、その内容について15分程度の口頭によるプレゼンテーションを行う。
◆修士研究（Ⅲ）では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいた具体的なテーマを設定し、それについての調査・論考を文章にまとめるとともに、説得力のある効果的な口頭プレゼンテーションを行うことが求められる。例えば修了演奏の主たる曲目についての楽曲分析や演奏解釈、修了作品の制作過程の記録と検証などが適している。
◆この授業では、担当教員の個別指

## 学修成果

執筆の過程を通じて、学術的な研究に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
口頭によるプレゼンテーションの資料を作成することにより、様々なプレゼンテーション・ツールを使いこなすことができるようになる。
執筆・口頭発表・口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

## 授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と研究タイトルの決定
～修士研究題目および修士研究執筆計画書の提出に向けた指導

第2回　執筆の予備的作業①　基礎知識の整理と必要な資料のリストアップ

第3回　執筆の予備的作業②　研究の構想を練り、全体の論旨と構成、プレゼンテーションの方法を考える／研究倫理審査（「履修上の注意」を参照）の要・不要の確認

第4回　執筆①　導入の書き方・導入部の執筆

第5回　（以下、三部構成の場合を例にしている。他の構成の場合もこれに準ずる）
執筆②　第１の部分の執筆

第6回　執筆③　第１の部分の推敲

第7回　執筆④　第２の部分の執筆

第8回　執筆⑤　第２の部分の推敲

第9回　執筆⑥　第３の部分（結論）の執筆

第10回　執筆⑧　第３の部分（結論）の推敲、および全体の論旨の確認と見直し

第11回　プレゼンテーションの準備①　効果的なプレゼンテーションのポイントを考える

第12回　プレゼンテーションの準備②　プレゼンテーションの素材を作成する

第13回　プレゼンテーションの準備③　プレゼンテーションの練習とフィードバック、およびディスカッション

第14回　執筆⑨　要旨を執筆する

第15回　提出前の最終確認　本文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

## 履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士研究を執筆する年度当初に「修士研究執筆計画書」の提出、「修士研究題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆研究の執筆に当たっては研究倫理に留意し

## 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「図書館ガイダンス」への参加
③「研究倫理ガイダンス」への参加
④口頭試問で指摘を受け

## 教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文・レポートの執筆から文献表記法まで』（改訂新版）春秋社刊

科目名－クラス名

# 原典講読研究Ⅰ

**曜日時限**

火 4時限

**担当教員**

石川　亮子

| 授業形態 | 開講年次 | 開講期 | 単位数 |
|---|---|---|---|
| 講義 | 1～ | 前期 | 2 |

| 評価方法 | 定期試験 | | | | その他の試験 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価種別 | 筆記・実技 | 課題提出 | 作品提出 | 成果発表 | 授業内小テスト | |
| 評価割合 | 70 | 0 | 0 | 0 | 30 | 100 |

## 教育到達目標と概要

ドイツ語で書かれた音楽文献を講読することで、音楽についてのドイツ語に関わる読解力を養うと同時に、ドイツ＝オーストリアの歴史的・文化的関係についても考察することを目的とする。ドイツ語で書かれた音楽事典として、音楽を専門とする者にとって最も重要なＭＧＧを読み解けることが出来るようになることを目標に、楽譜の序文やＣＤ解説、ドイツ・リートの詩やオペラ台本など、音楽家として接する様々なタイプのドイツ語を題材とする。

## 学修成果

・音楽に関するドイツ語に慣れ親しみ、音楽についてのドイツ語に関わる基本的な読解力を身に付けることが出来る。
・学術的な研究姿勢を養うことが出来る。
・ドイツ＝オーストリア音楽に関する知識を身に付けるとともに、それらを歴史的・文化的知識や認識と結び付けて考察し、専門分野への応用を図ることができる。

## 授業展開と内容

| | |
|---|---|
| 第1回 | ガイダンス：辞書について、学修の仕方について |
| 第2回 | ＭＧＧの項目を読む①―単語と文法事項を確認する |
| 第3回 | ＭＧＧの項目を読む①―全体の文意を理解する |
| 第4回 | ＭＧＧの項目を読む①―訳文を仕上げる |
| 第5回 | 楽譜の序文を読む―単語と文法事項を確認する |
| 第6回 | 楽譜の序文を読む―全体の文意を理解する |
| 第7回 | 楽譜の序文を読む―訳文を仕上げる＆授業内小テスト（単語） |
| 第8回 | ＣＤ解説を読む―単語と文法事項を確認する |
| 第9回 | ＣＤ解説を読む―全体の文意を理解する |
| 第10回 | ＣＤ解説を読む―訳文を仕上げる＆授業内小テスト（作文） |
| 第11回 | ドイツ・リートの詩を読む―単語と文法事項を確認する＆全体の文意を理解する |
| 第12回 | ドイツ・リートの詩を読む―訳文を仕上げる＆授業内小テスト（単語） |
| 第13回 | ドイツ語によるオペラ台本を読む―単語と文法事項を確認する＆全体の文意を理解する |
| 第14回 | ドイツ語によるオペラ台本を読む―訳文を仕上げる＆授業内小テスト（作文） |
| 第15回 | 総括：ＭＧＧの項目を読む② |
| 第16回 | |
| 第17回 | |
| 第18回 | |
| 第19回 | |
| 第20回 | |
| 第21回 | |
| 第22回 | |
| 第23回 | |
| 第24回 | |
| 第25回 | |
| 第26回 | |
| 第27回 | |
| 第28回 | |
| 第29回 | |
| 第30回 | |

## 履修上の注意

楽書講読という授業の性格上、初心者の履修は認められない。ドイツ語を1年以上、勉強した者のみ履修すること。必ず、独和辞書を持参すること（辞書についてはオリエンテーションにて説明）。文法も並行して学習することが望まれる。

### 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習として、毎回必ず下訳を作成すること（60分）。また復習として、毎回単語帳を作ってきちんと覚えること（60分）。

### 教科書・参考書

特になし。その都度配付、または指示する。

2022 年度（後期・通年）「学生による授業評価アンケート」に対する授業改善計画書

教員コード：1863　教員名：石川亮子

1）評価結果に対する所見

所見として、まず触れなければならないのは、回収率の低さであろう。むろん Forms から紙に逆戻りすることはないとしても、回収率を上げなければ、学生からの声を公正に聴く機会を得ることにはならない。そのため実施時期について、再度、検討をお願いしたいと考える。14 回目の授業日というアンケートの設定は、定期試験に向けて授業内容も集中していく時期であり、学生側も教員側も、なかなか授業評価アンケートという雰囲気にならない。もう少し余裕のある時期に実施する可能性を検討していただければと思う。

担当している科目についてであるが、「音楽基礎演習」について、STA がいてくれて安心して学ぶことができたという記述は、STA を含めたチーム・ティーチングが高い教育効果をもたらすものであることを示している。また、メディア授業科目として運用している「西洋音楽史Ⅱ」について、オンデマンド 9 回、対面授業 6 回の組み合わせを、新鮮でおもしろかったという意見も複数みられた一方で、わかりにくいと感じている学生もいた。さらに、「器楽の歴史と作品」の科目の位置付けについて、西洋音楽史Ⅰの知識を前提とすることを理解できていないコメントが見られたため、音楽史関係科目のカリキュラム全体をきちんと説明する必要があると感じた。様々な情報をいかにわかりやすく明快に発信していくことができるか、もう一度よく考えて実践していきたい。

2）要望への対応・改善方策

以下の 2 点（次年度は特に第 1 の点）に重点を置いていきたい。

・対話、コミュニケーションを意識する

対面授業であれば出席カードの裏面、メディア授業科目であれば確認小テスト Forms 等を活用して、質問やもっと知りたいと感じたことを提出してもらい、次の授業で答えるようにする。その他の方法も取り入れながら、講義であっても対話型の授業を心がけていく。

・導入とまとめの工夫

授業開始の始めの 10 分間について、その日の授業に興味を引き付けられるよう、より効果的な導入を心掛ける。また終わりの 10 分間についても、その日の内容をまとめるとともに、次回の授業へと興味を持続させるよう工夫する。

3）今後の課題

授業評価アンケートの意義を学生とも共有することで、回収率の向上を目指したい。

以上